

# 横浜の旧日本軍施設

## 日本軍施設と米軍施設

戦前の横浜には、戸塚区・磯子区といった南部を中心に、郊外部にいくつかの大きな日本軍施設があった。

これら郊外部の軍施設のなかには、戦後接収され、米軍施設として長く利用された施設も多かった。最近返還された深谷通信所と上瀬谷通信施設や、すでに返還された田奈弾薬庫・大船倉庫地区・富岡倉庫地区・小柴貯油施設（水域除く）、未返還の池子住宅地区などは、いずれも元日本軍施設である。

『横浜市史Ⅱ』第一巻下（横浜市、一九九六年）では、地域の五八の陸海軍施設を表と図で示している。最も網羅的な一覧といえるが、防衛省所蔵の資料や、各地域の郷土史など様々な資料・文献をまとめたために重複や不統一も見受けられる。そこで、横浜市内における日本軍施設一つひとつの調査を、改めて実施することとした。

当時の一次資料は、余り残っていない。防衛省に残されている資料の内軍施設の状況を示すものは、戦後、占領軍の進駐、武装解除に当たって、日本軍施設の現況を連合国軍に報告した「引渡目録」の類いが中心である。

その他、先の『横浜市史Ⅱ』の表の元にもなった「陸海軍附属建物調査（横浜市）」という一覧表が、戦時中横浜市長だった半井清の資料に残されてい

る（横浜市史資料室所蔵）。作成者や時期は不明だが、おそらく「引渡目録」と同種の資料と思われる。洩れもあるが、当時の市内日本軍施設の多くを網羅している。

今回は、軍資料、および地元の郷土史等を確認し、市内軍施設の名称と位置、そして戦後の経緯について紹介したい。主な三〇の軍施設について、現在までに判明したことを表にまとめたので、それに従って見ていく。

### 連合艦隊司令部と田奈部隊

港北区には、連合艦隊司令部と田奈部隊等があった。日吉台の慶応大学を中心とする一帯には、戦争末期海軍の主要な機関が移ってきた。一九四四（昭和一九）年から四五年にかけて、連合艦隊司令部・海軍総隊司令部（慶応大学）の他、海軍航空本部（慶応大学）や艦政本部（箕輪町）などが移転してきた。その詳細については、神奈川県立歴史博物館の展示図録である『陸にあがった海軍 連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争』（二〇一五年）に詳しいので、そちらに譲りたい。

慶応大学は戦後米軍に接収され、一九五七（昭和三二年）年に返還されるが、当時の建物の一部は、現在も慶応大学の校舎や寮として残っている。なお、慶応大学敷地内には他にも軍司令部第三部等があり、日吉台国民学校には海軍省人事局功績調査部、太尾町の大倉山記念館に海軍気象部など、港北区

内には様々な海軍機関が集中していた。

田奈部隊は、横浜では少数派の陸軍の施設である。田奈部隊の倉庫が奈良町に、陸軍兵器補給廠の倉庫と宿舍が恩田町にあったと、先の「陸海軍附属建物調査」に記されている。いずれも、東京陸軍兵器補給廠の施設である。

一九四〇（昭和一五）年五月一日の付の、「陸密第八七八号 陸軍兵器補給廠ノ分廠ノ名称及位置ノ件達」（防衛省防衛研究所所蔵、アジア歴史資料センター公開、以下とくに断らない限り、日本陸海軍資料は同所蔵・公開）によれば、施設名は東京陸軍兵器補給廠田奈分廠である。一九三八年・三九年頃から用地買収が始まり、施設の完成時期は不明だが、一九四〇年五月に正式に開設されたと見てよいだろう。

田奈部隊は戦後米軍に接収されて米軍田奈弾薬庫となり、一九六〇（昭和三五）年に返還された後、一九六五年にこどもの国が開園、現在に至る。

田奈部隊についての軍資料は少ないが、『続 田奈の郷土誌』（一九六六年）が、開設から戦後の接収に至るまでかなり詳しく記述し、関連文献の基本となっている。田奈と恩田それぞれの詳細な配置図も掲載されているが、今のところ防衛省では同種の図は見当たらず、同書掲載の配置図がその後の様々な文献等でも援用されている。同書は恩田の図面について、「終戦当時の書類による」と記しており、おそらく地元関係者の手元に残された図面ではな

いかと思われる。

その後の文献としては、『横浜緑区史 通史編』（緑区史刊行委員会、一九九三年）が田奈部隊と学徒勤労動員について詳しく述べている。また、酒井智恵子『田奈の森』（近代文芸社、一九九五年）は学徒勤労動員の当事者による証言として貴重である。

### 横浜憲兵隊と横浜連隊区司令部

太平洋戦争が始まってから、山下町を中心に様々な海軍施設、その他本土防衛のための陸軍部隊が各地に配置されたが、戦時中の軍施設には不明な点が多い。ここでは、比較的経緯のはっきりしている横浜憲兵隊と横浜連隊区司令部のみを取り上げる。

日中戦争開戦まで、横浜憲兵隊だけが市内常設の陸軍部隊であった。一九二五（大正一四）年六月に中区宮川町三丁目に新庁舎ができ、一九四二（昭和一七）年九月に山下町に移転した（詳しくは吉田律人「横浜憲兵隊の創設」『市史通信』第八号、横浜市史資料室、二〇一〇年七月三一日参照）。

西区老松町の老松国民学校（現老松中学校）に隣接して、横浜連隊区司令部があった。一九四一年四月六月に、開庁式を行っている（『神奈川県新聞』四月七日）。連隊区司令部とは、徴兵・召集に関する事務を取り扱う軍の機関であり、連隊の部隊が駐屯していたわけではない。その庁舎等の配置図は、同司令部の「引継目録」に添付されて

横浜市の日本軍施設

No	区	現区	所在地	施設名	開設	米軍施設名	返還	現在	
1	港北区	青葉区	奈良町	東京陸軍兵器補給廠田奈部隊	1940年	田奈弾薬倉庫	1960年	こどもの国	
2			恩田町	東京陸軍兵器補給廠恩田倉庫					
3		港北区	日吉町	連合艦隊司令部・海軍総隊司令部	1944年9月29日	自動車修理学校・慶応大学住宅地区	1957年	慶応大学	
4				海軍航空本部	1945年				
5				軍司令部第三部					
6				海軍省人事局	1945年2月				
7				海軍東京警備隊第七分隊	1945年				
8				日吉本町	海軍省人事局功績調査部				1944年9月10日
9		箕輪町	海軍艦政本部						
10			太尾町	海軍気象部	1945年9月1日		大倉山記念館		
11	西区	西区	老松町	横浜連隊区司令部	1941年4月6日		老松住宅		
12	中区	中区	山下町	横浜憲兵隊本部	1942年9月		横浜地方合同庁舎		
13			根岸台	第二海軍技術廠根岸実験室					
14	瀬谷区	瀬谷町	横須賀海軍軍需部瀬谷火薬庫	1941年	上瀬谷通信施設	2015年6月30日			
15			第二海軍航空廠瀬谷補給工場						
16	泉区	中田町・和泉町・深谷町	海軍東京通信隊戸塚分遣隊		深谷通信所	2014年6月30日			
17			中田町	横須賀設営隊(横須賀海軍施設部設営班、桑原部隊)	1944年			中田小学校	
18			岡津町・中田町	横須賀設営隊実習場				しらゆり公園周辺	
19	戸塚区	戸塚区	原宿町	戸塚海軍病院	1943年		横浜医療センター		
20			戸塚衛生学校	1945年4月1日					
21			吉田町	軍用鍛錬馬場	1940年2月27日	PX中央倉庫	日立製作所横浜研究所他		
22	栄区	笠間町	海軍燃料倉庫						
23			横須賀海軍第一技術廠養成所				笠間住宅		
24			小菅ヶ谷町	第一海軍燃料廠	1941年	大船倉庫地区	1971年2月	本郷中学校・柏陽高校・神奈川県警察学校 他	
25	磯子区	金沢区	富岡町	横浜海軍航空隊	1937年3月27日	富岡倉庫地区		富岡総合公園・神奈川県警機動隊・富岡住宅	
26			柴町	海軍軍需部柴燃料貯蔵場		小柴貯油施設	2005年12月14日		
27			釜利谷町・大川町	第一海軍技術廠支廠(海軍航空技術廠支廠)	1941年4月				横浜市立大学・金沢高校・総合車輛製作所
28				第二海軍技術廠					
29				六浦町	海軍航空技術廠工具養成所	1933年			関東学院大学
30			海軍軍需部池子火薬庫地帯・第二海軍航空廠横須賀補給工場池子火薬庫	1942年	池子弾薬庫→池子住宅地区				

注：(1)「区」および「所在地」は、当時の区名と町名を示す。「現区」は現在の区を示した。(2)施設名は、当時の軍資料にみられる名称に統一した。(3)「開設」の年月日は推定を含む。(4)「米軍施設名」は、代表的な施設名を示した。(5)「返還」の年月日は、横浜市渉外部(現基地対策課)の資料に基づく。(6)「現在」には、特定できた現在の施設名等を示した。

いる。なお、中区の第二海軍技術廠根岸実験室については後述する。

**旧戸塚区の日本軍施設**

旧戸塚区は、旧磯子区と並んで海軍施設が集中していた地域である。その

中では、吉田町にあった軍用鍛錬馬場が異色の存在といえよう。

一九三三(昭和八)年以来競馬が開催されていた戸塚競馬場は、戦時体制のなか一九四〇年に軍用馬を育成するための軍用鍛錬馬場となった。一九四

二年に競馬場が汲沢に移転した後四四年に、競馬場跡地は日本光学戸塚工場となる。そして、戦後米軍に接収されてPX中央倉庫となり、一九五八(昭和三三)年に返還された後に日立製作所横浜工場となった。以上の経緯は、

二年に競馬場が汲沢に移転した後四四年に、競馬場跡地は日本光学戸塚工場となる。そして、戦後米軍に接収されてPX中央倉庫となり、一九五八(昭和三三)年に返還された後に日立製作所横浜工場となった。以上の経緯は、

大橋俊雄『戸塚の歴史』(文華堂書店、一九八七年)および、馬の博物館ホームページの学芸員便りなどによる。

瀬谷町(現瀬谷区)にあった火薬庫・倉庫群は、海軍軍需部瀬谷火薬庫と第二海軍航空廠瀬谷補給工場の複合施設であったと思われる。「終戦時に於ける横須賀鎮守府関係資料」(防衛省所蔵)には、この両施設が併記されている。第二海軍航空廠は、海軍航空技術廠(一九三九年改称)の前身である海軍航空廠(一九三二年設立)と混同されることがあるが、一九四一(昭和一六)年九月に新たに制定された海軍航空廠令に基づく別の機関である。

第二海軍航空廠は木更津に本部があり、瀬谷はその分工場ということになる。開設は一九四一年頃と考えられるが、一方の軍需部火薬庫については不明である。いずれも海軍軍需部・第二海軍航空廠の引渡目録に、それぞれ施設配置図が添付されている。

横浜・瀬谷地図くらぶ『地図で辿る瀬谷の移り変わり』(二〇〇四年)は、これらの防衛省の資料もふまえ、とくに軍用鉄道(引込線)については地元住民や関係者からの聞き取りも加えて、実態に迫っている。上記の二枚の配置図を合成し、瀬谷駅(現相鉄線)からの引込線や道路(海軍道路)も含む周辺の地図を作成、掲載している。

瀬谷の火薬庫・倉庫群は戦後接収され、一九四七(昭和二二)年にいったん解除されたが、一九五一年に再接収

されて、上瀬谷通信施設（米海軍通信所）となった（横浜市渉外部『横浜市内の基地の概要』一九六七年等による）。その後、同施設周辺の電波障害地区指定にともない、地元住民の暮らしに様々な制約が課されて、大きな社会問題ともなったが、二〇一五（平成二七）年六月に返還された。

海軍通信隊戸塚分遣隊は、「陸海軍附属建物調書」および「終戦時に於ける横須賀鎮守府関係資料」に記載がある。「建物調書」では住所が深谷町・汲沢町（現戸塚区）となっているが、これは本部などの建物の所在地と思われる、通信施設は主に中田町・和泉町（現泉区）にあった。

開設時期など詳細は不明である。『いずみ いまむかし 泉区小史』（泉区役所、一九九六年）が、開設の経緯に触れている。戦後接收され、米海軍の深谷通信所として利用されていたが、二〇一四年六月に返還された。

### 戸塚海軍病院と第一海軍燃料廠

原宿町（現戸塚区）の戸塚海軍病院および衛生学校は、それぞれ「陸海軍附属建物調書」と「終戦時に於ける横須賀鎮守府関係資料」に記載があるが、開設の経緯など詳細は不明である。

一九四三（昭和一八）年に開設（大橋俊雄『戸塚の歴史』）、同時に海軍軍医学校の分校あるいは練習部を置き、これを後に戸塚海軍衛生学校として独立させたとされる（海軍軍医学校戸塚

一期会『海ゆかば』一九七六年）。戸塚海軍病院と衛生学校の引渡目録に、それぞれの配置図が添付されている。

赤十字から派遣されて戸塚海軍病院に戦後まで勤めていた横田晴江さんが、体験手記を残しており、戦争末期から戦後にかけての貴重な証言となっている（報告書『横浜の戦争 市民と兵士の記録』横浜市史資料室、二〇一七年に収録）。その中でも触れられているが、一九四五（昭和二〇）年九月、米軍の進駐にともない、病院施設は一時桑原部隊跡地に移った。元の戸塚海軍病院は結局接收されることなく、同年一二月に国立戸塚病院（後に国立横浜病院、国立病院横浜医療センター）として再開した。この間、病院では復員した傷病兵などを收容した。

桑原部隊とは、横須賀設営隊（横須賀海軍施設設営班）のことで、部隊長桑原芳樹中佐の名を取って桑原部隊と呼ばれた。中田町に本部と兵舎があり（現在の中田小学校付近）、『いずみ いまむかし』によれば、一九四四年に開隊、ブルドーザーなども装備した設営部隊だったようだ。本部から少し離れて、中田町から岡津町にかけての広大な土地（現在のしらゆり公園一帯）に実習場があったという。

小菅ヶ谷町（現栄区）の第一海軍燃料廠については、『栄の歴史』（栄区役所地域振興課、二〇一三年）に詳しい。燃料懇話会『日本海軍燃料史』（原書房、一九七二年）等の記述によると、

山口県徳山にあった海軍燃料廠の航空機燃料の研究部門が小菅ヶ谷町に移転し、一九四一（昭和一六）年四月二一日の改組によって第一海軍燃料廠が発足した（内令第四一〇号、内令とは海軍の軍令）。その詳細な配置図が、『日本海軍燃料史』に掲載されている。

戦後接收されて米軍の大船倉庫地区となり、一九七一年に返還されて、今は本郷中学校・柏陽高校・神奈川警察学校などとなっている。

「陸海軍附属建物調書」には、小菅ヶ谷町の他に笠間町に燃料廠倉庫や第一海軍技術廠養成所などの施設があったとされている。第一海軍燃料廠を中心とした海軍施設については、菊田清一『第一海軍燃料廠とその周辺の戦争遺跡』（二〇〇二年）が詳しい。それによれば、大船駅北側の鉄道線路東側に燃料廠の倉庫があり、その北、現在の笠間住宅付近に第一海軍技術廠養成所があったという。さらに、鎌倉市大船町の現鎌倉女子大学中等部・高等部には、「海軍主要官衛部隊一覧表」（防衛省所蔵）にも記載のある第一海軍燃料廠第三海軍技手養成所があった。

最後に、海軍施設が最も集中していた旧磯子区、現金沢区の日本軍施設について見ていく。

### 横浜海軍航空隊

この地域の軍施設については、横浜金沢の戦跡を調査する会『横浜金沢の戦跡』（二〇一二年）の他、葛城峻氏

が精力的な調査を行い、講座等で紹介している（講座資料の「横浜南部の戦争遺跡をめぐって（稿）」等は横浜市の図書館で閲覧することができる）。また、神奈川県立金沢文庫の展示図録『目でみる近代の金沢』（二〇〇三年）は、貴重な資料や写真を図版で紹介しており、たいへん参考になる。

日中戦争前の一九三六（昭和一一）年一〇月、富岡町に横浜海軍航空隊が開設された。同部隊は、日本で最初の飛行艇部隊であった。開設までの経緯が、新聞記事で詳しく紹介されている。横浜海軍航空隊の開設は、一九三四年にさかのぼり、一月一日に富岡で起工式が行われた（『横浜貿易新報』一月一日・一日、『読売新聞』一月一日・一日）。

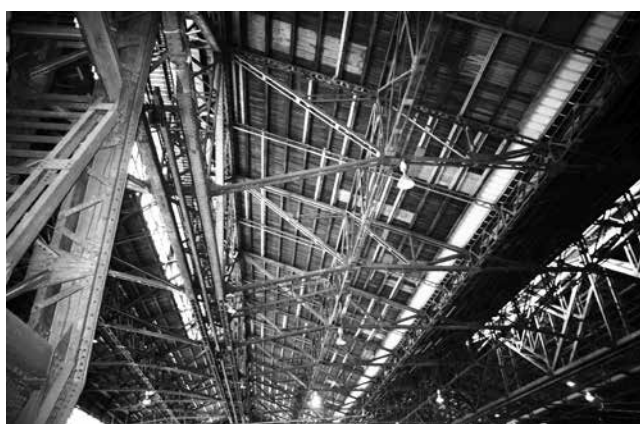
二年後の三六年一〇月一日、現金沢区域が横浜市に編入された日、横浜海軍航空隊の開隊式が開催された。同日付で初代司令官に任命された加藤尚雄大佐によって軍艦旗が掲揚され、初飛行も行われた（『読売新聞』九月二十九日、『東京朝日新聞』一〇月一日、『横浜貿易新報』一〇月一日・二日）。

開隊時に庁舎はできていたようだが、その他施設の工事は続き、翌一九三七年三月二十七日ようやく竣工式を迎えた。竣工式は、今も残る大格納庫（現神奈川県警察第一機動隊構内、写真参照）で開かれ、小学生の旗行列が行われるなど町を挙げての祝賀行事となった（『読売新聞』三月二六日・二八日、



元横浜海軍航空隊の格納庫 神奈川県警察第一機動隊構内

『東京朝日新聞』三月二十六日・二十八日）。地元にとって、あるいは施設としてはこの日が本格的な開設といってもよいだろう。なお、横浜市史資料室『紀要』第七号（二〇一七年三月）に掲載した論文「兵士となった市民の戦争体験―都市横浜の戦争―」で、不注意により横浜海軍航空隊の開設時期を誤って記したので、ここで訂正しておきたい。横浜海軍航空隊は、太平洋戦争開戦にともない南方に派遣され、一九四二年八月にソロモン諸島のツラギ島で玉砕した。その後再編されて、同年一月一日には第八〇一海軍航空隊と改称される。一九四五年に入ると、残存飛行艇も香川県の詫間海軍航空隊に移され、横浜海軍航空隊の施設はほとんど



格納庫の屋根を支える巨大な支柱（左）と鉄骨

機能していなかったと思われる。戦後、米軍は横浜海軍航空隊を接收し、富岡倉庫地区として長く使用した。一九七一年（昭和四六）年二月に返還された後は、富岡総合公園の他、神奈川県警察第一機動隊・富岡住宅などとなっている。富岡総合公園内には、元の隊門が残り、浜空神社や浜空の碑があり、碑文には横浜海軍航空隊の歩みも記されている。

### 海軍航空技術廠支廠

金沢八景駅近くの釜利谷町から大川町にかけて、かつて海軍航空技術廠支廠があった。海軍航空技術廠は、一九三二（昭和七）年、海軍航空廠として横須賀に開設され、航空機やエンジン

などの研究・開発に当たっていた（空技廠について詳しくは、『新横須賀市史別編 軍事』横須賀市、二〇一二年参照）。その後、一九三九年四月に海軍航空技術廠と改称し、日中戦争後の拡充の結果、一九四一年四月釜利谷に支廠が開設された。

一九四五（昭和二〇）年二月に海軍航空技術廠は第一海軍技術廠となり、支廠も同支廠となった。また、これとは別に新たに第二海軍技術廠が組織され、その本部は支廠内に置かれた。中区根岸台の根岸競馬場一等馬見所内にあったという根岸実験室は、この第二海軍技術廠の付属施設である。

さらに、海軍航空技術廠付属の施設として、六浦町の海側に工具養成所があった。一九三三年、海軍航空廠教習所として開設、海軍航空技術廠への改称にともない工具養成所となった。

第一海軍技術廠と第二海軍技術廠・根岸実験室の配置図が、それぞれの引渡目録に添付されている。戦後、根岸競馬場を除く施設は接收を免れて払い下げられ、支廠の敷地には横浜市立大学・金沢高校・東急車輛（現在は総合車輛製作所）などが入り、工具養成所は関東学院に引き継がれた。

六浦町の内陸側、逗子市にまたがって海軍の池子火薬庫地帯があった。戦後米軍に接收されて池子弾薬庫として使用され、現在は池子住宅地区となっている。市内の未返還地区の一つである。池子火薬庫地帯の配置図が、海軍

軍需部および第二海軍航空廠の引渡目録に添付されている。それぞれ軍需部火薬庫と横須賀補給工場池子火薬庫と記されているが、この二つの施設が併存していたのか、判然としない。

逗子市の調査によれば、一九三八年頃から軍需部火薬庫のための用地買収が始まったという。また、横浜市側には谷戸田注填所があったとする文献もあるが、軍資料に谷戸田注填所という名称はでてこない（横須賀海軍工廠造兵部の谷戸田宿舎は確認できる）。

柴町の海岸近く（埋立前）には、海軍軍需部の柴燃料貯蔵場があった。一九三六年頃に土地の買収があり、『横浜貿易新報』二月二日、その後開設されたと思われる。軍需部の引渡目録に配置図がある。戦後米軍に接收されて小柴貯油施設となり、陸地部は二〇〇五（平成一七）年二月に返還された。

この他に、今回は詳細が不明なため紹介しなかった施設も多い。なかでも、太平洋戦争後に海軍軍需部の施設や分散倉庫が横浜市内各地に設けられたが、その実態はよくわかっていない。また、海軍の第二二戦隊と横浜港湾警備隊、陸軍の横浜警備部隊などは、部隊としてはよく知られているが、本部の所在地など施設についてはまだ詳細が確認できず、今回は触れなかった。いずれも今後の課題とし、調査を継続していきたい。

（羽田博昭）